

福岡県三井郡小郡遺跡

発掘調査概報

1967夏—秋

1968

福岡県教育委員会

発刊のことば

福岡県教育委員会はこのたび、国庫補助を受けて、小郡遺跡の緊急調査を行なった。この調査を指導された奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部の協力を得て概報が完成したので、印刷に付して、一般の活用に資する次第である。

なお、本書発刊にあたり、調査を担当され、また原稿を執筆された各位、ならびに援助と協力をいただいた各方面に深甚の謝意を表す。

とくに、現地調査から、本書の発刊まで、終始指導と援助をいただいた奈良国立文化財研究所と、また進行途上の農地改良工事をまったく中止してこの調査にご協力いただいた土地所有者の赤坂庄蔵氏ご一家には、感謝の言葉もない。

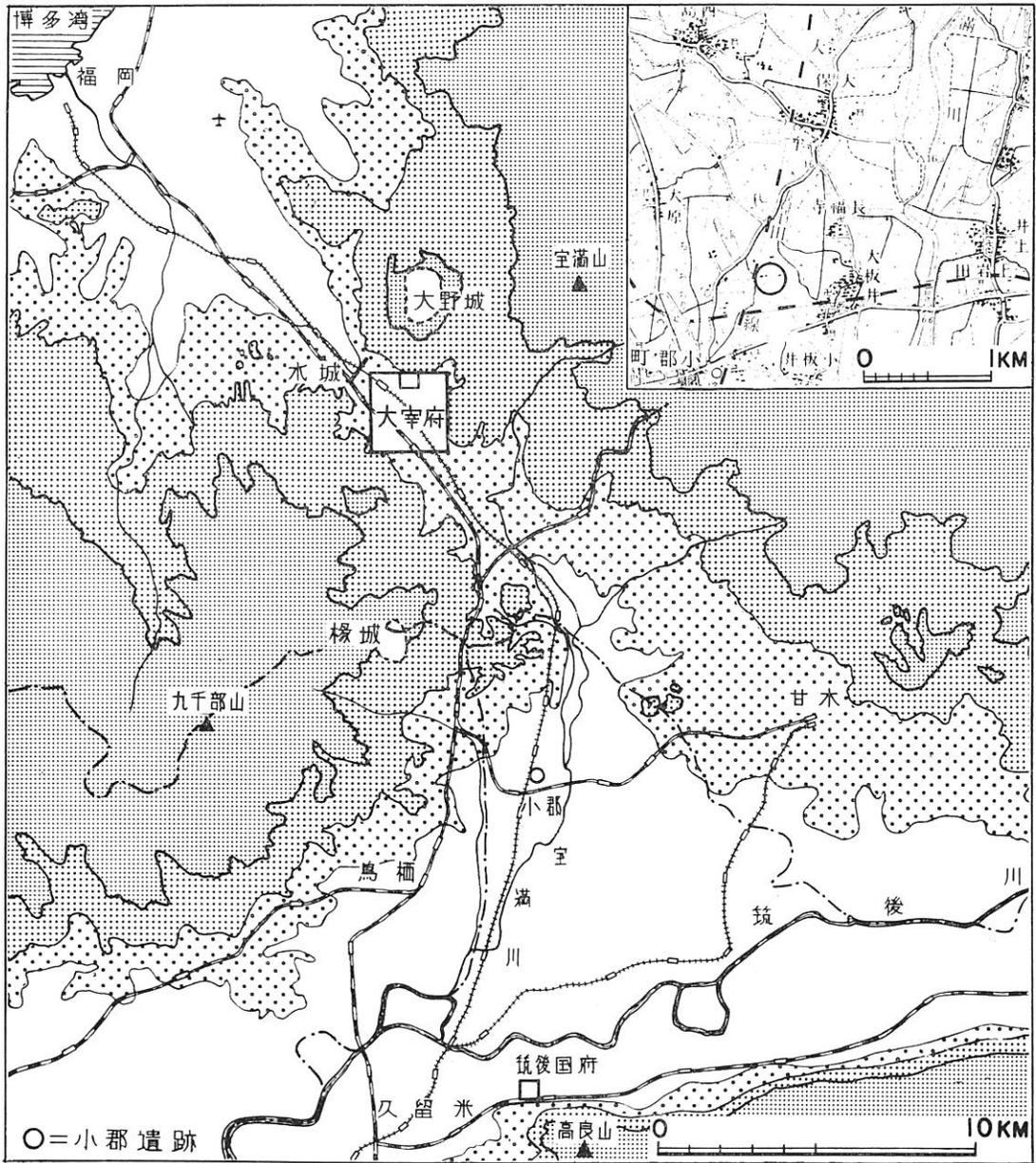
昭和43年3月31日

福岡県教育委員会教育長

吉 久 勝 美

目 次

I	発掘調査の経過	1
II	遺跡の地形と環境	1
III	発掘調査のあらまし	3
IV	弥生時代の遺構	4
	1 前期	4
	2 中期	6
	3 後期	6
V	奈良時代の遺構	10
	1 掘立柱建物	10
	2 建物の遺物の関係	12
VI	む す び	13



第2図 小郡遺跡付近環境図

右上の地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号) 昭、43 第8573号

小郡遺跡の南には筑紫平野が開け、東約1.3kmには宝満川が起伏のある平野をほぼ北から南へ流れて、久留米市北部で筑後川に合流している。北西には檜城のある基山とそれにつらなる周辺の山々が間近にみえ、北方には遠く宝満山がそびえている。この宝満山と基山と間の細長い平野が、博多と筑紫平野を結ぶ古代からの交通の要衝で、その中間に太宰府があり、当遺跡の北北西約13kmのところである。小郡遺跡付近は古く明治の頃から字大板井の甕棺遺跡として知られており、これまでに弥生時代中期の甕棺や広形銅戈が出土している。そのほか同町吹上からは弥生時代前期中頃の土器が、寺福童からは後期初頭の合口甕棺が報告されている。古墳時代に関する遺跡は、これまでのところほ



第4図 BH地区西トレンチ全景

の状況をたしかめ、今後の調査計画をたてるためのトレンチ調査もおこなった(約11.3a)。ここでは造成に際して地表面が削り去られておらず、約15cmの厚さで表土が残っていた。その結果、南の地区で確認できなかった住居跡や浅い溝、各時期にぞくする小穴をみつけることができ(第4図)、今後の全面的な発掘調査の必要性がでてきた。このため遺構は位置を確認しただけで、大半は後日の調査にまわすこととした。また多数の鉄鏝が出たといわれる個所を調査するためBE地区を発掘したところ、東西溝を確認し、鉄鏝はこの溝の埋土中にあったことを知った。

今回の発掘調査の総面積は47aで、未調査の造成地は140aである。

検出した遺構は、弥生時代の前・中・後の各時期のものと奈良時代のもので、それぞれの時期にぞくする遺物も採集している。古墳時代のはっきりした遺構はなかったが、同時代の遺物を二、三採集した。

Ⅳ 弥生時代の遺構

前期 弥生時代の前期を代表する遺構は、総数80個以上の袋状土壇である。そのうち26個所は完掘し、11個所は土層の堆積状況を観察するために半掘のみであり、残りは位置を確認したのみで掘り下げるにいたっていない。土壇はそのほとんどがBB地区に密集して見つかった(図版1-下)。BB地区はおそらく遺跡全体からみてもほぼ中心であるとおもわれる。今回調査したかぎりでは、土壇のおのおのは互に重複しあうことはまずなく、ただ33号土壇と47号土壇が切りあっていただけである。

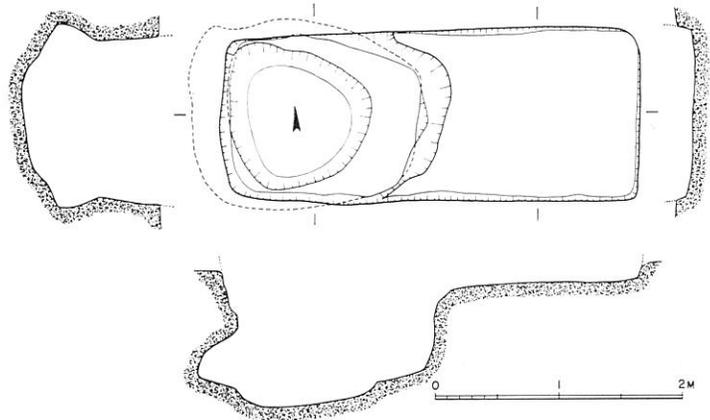
BB地区付近はもとの地表面から1m近く削られているため、土壇がどの層位から切り込んで作られたものであるのかははっきり決めにくい。BA地区の東端に残された旧地表面のわかる断面で観察すると、土層の堆積は20cm余の表土層の下に黒褐色土が約50cm堆積し、その下に黄色または黄褐色の粘土が50~60cmほどあって基盤に続くらしい。BB地区の土壇はおそらくこの黒褐色土の上面または途中から作られたと考えられるため、土壇の上部約80cmはすでに失われたとみななければならない。したがって土壇の入口の大きさ・形についても明らかでないが、トレンチ調査地区から類推すると径1m前後のほぼ円形をしていたらしいことがわかる。

現状では袋状土壇の形と大きさはまちまちで、その断面形をみると、底辺で最も広がるもの(第5図)と、底から1m余の位置で最も広く張るものとの2者がある。前者の1例(29号土壇)に対し残りはすべて後者にぞくするものである。後者は土壇を使わなくなって放棄したのちに、幾度も壁がくずれ落

また2、3の土壙ではその最上層の堆積土中から弥生時代中期初頭の土器片を見出すこともあった。このように袋状土壙は前期末にもまだ完全に埋ってしまっていなかったことは、当時において地表の凸凹が区別できたわけで、土壙どうしが互に重複して作られることがなかったこともうなずける。袋状土壙の密集地域は、この広い台地の上でも花崗岩のばいらん土壌が厚く堆積している部分に中心をもっているようで、このばいらん土壌からはずれるとみられる南のA区では袋状土壙は見あっていないし、北方トレンチ調査地域でも数はごく少ない。このことから、湿気が最も問題になる「貯蔵」のための土壙を掘るに適した地を選定していることがうかがえる。これらの袋状土壙群の時期にぞくする住居跡は、今回の発掘調査地域内では見つかっておらず今後の調査に期待がかけられる。なお、袋状土壙以外の個所でも弥生時代初頭の土器片がまったくみつからなかったのは不思議である。

中期 中期でもっとも顕著な遺構は、完形および復元可能な土器が沢山入っている土壙で、5個所ばかりみつかった。一番の好例はA J地区で検出した土壙(第8図・図版2—上)で、これも上面が削りとられたことを考慮しなければならないが、現平面では3.4m×1.4mの長方形をしている。土壙の西半分だけが深く凹み、東半分は浅くて底がたいらである。深い方はもとの深さ1.5mをこえ、北・西・南三方の壁がえぐれている。この深い部分に完形土器が十余個体分埋もれていた。土器は壺・甕・蓋・高坏・器台等で(第9図3・5)、ほかに刃部の欠損した磨製蛤刃石斧も1個出土している。これらの土器は、中期に多い塗彩によって飾られた祭祀用の土器ではなく、なぜこのように多くの土器が入っているのかいまのところ明らかでない。これらの土器型式は、従来の須玖式土器に一応相当するが、数種の器形がセットで出土しているので、整理の段階で検討すれば中期中葉の土器型式を考えるうえに役立つ資料となるだろう。ほかに中期の住居跡かと考えられるものをB F地区トレンチで検出したが、掘りきっていない。

後期 最も大きな遺構は、造成地の北東から西南に流れる全長100mにもおよぶ溝(図版2—下)で、幅1m余、深さは約1mはあったらと推定できる。この溝の断面形は、B A地区ではV字形をしており、A J地区ではU字形であって、中間部分は未発掘である。溝の中には多くの後期弥生式土器が埋没して

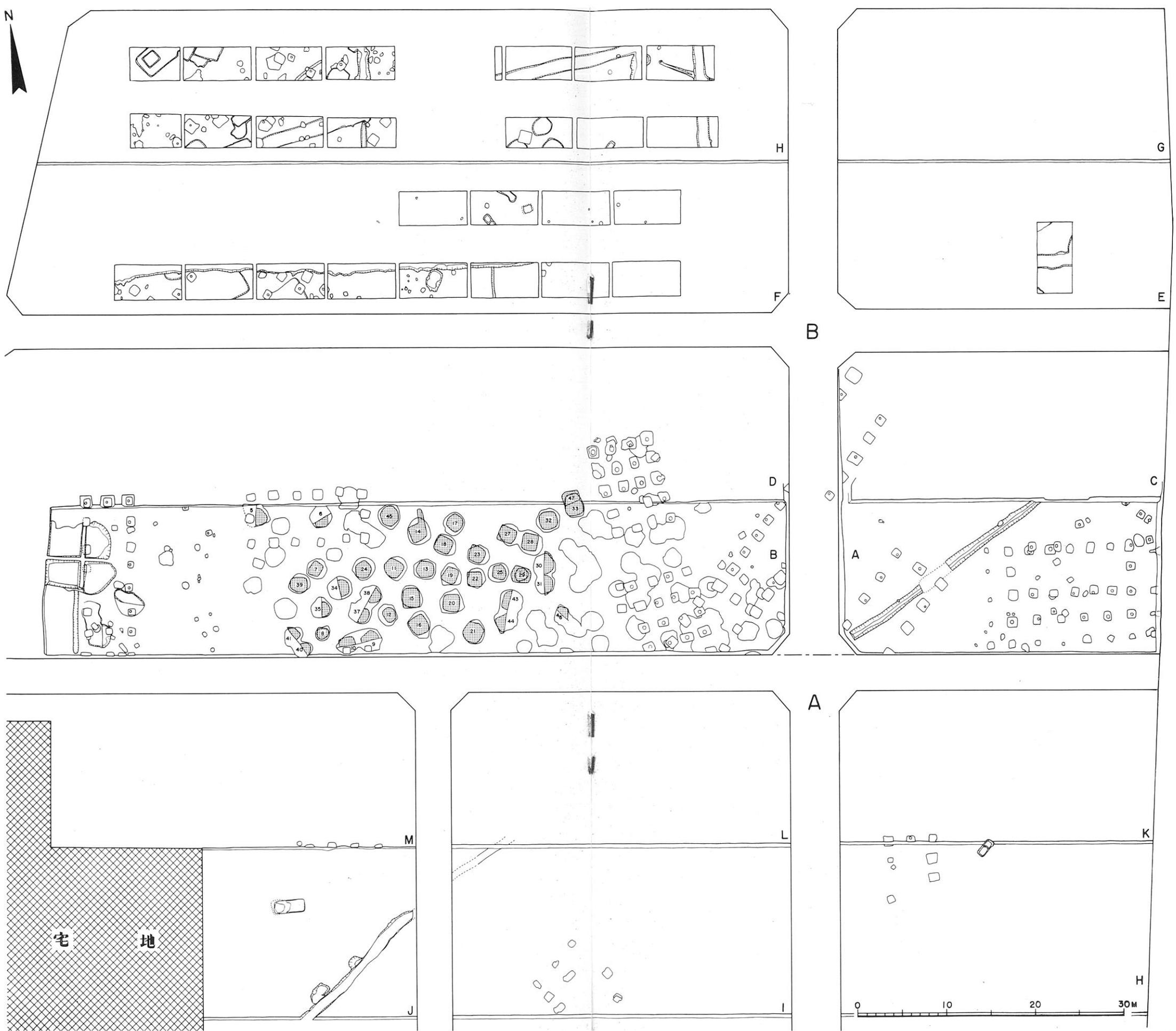


第8図 A J地区長方形土壙平面図および断面図

いるが、埋土の堆積状況からみると長い期間にわたって流れた溝とは思えない。溝中から数点の砥石も出土している。台地のすぐ南には水田に適した平地があるにもかかわらず、当時としてこの台地上で水田を営んでいたとは考えられないから、この溝は台地上での灌漑用水ではなく、ほかの目的で設けられたらしい。後期と思われる住居跡をB B地区北端の断面で確認したが、発掘はしていない。

このほか、B A地区中央東寄りが高床倉庫跡と考えられる柱穴計6個を検出した。2間(5m)×1間(3m)で、柱穴につまった黒色土から弥生時代にぞくするものとみられるが、前・中・後期のいずれのものかはわからない。

第 10 図
小郡遺跡遺構平面図



V 奈良時代の遺構

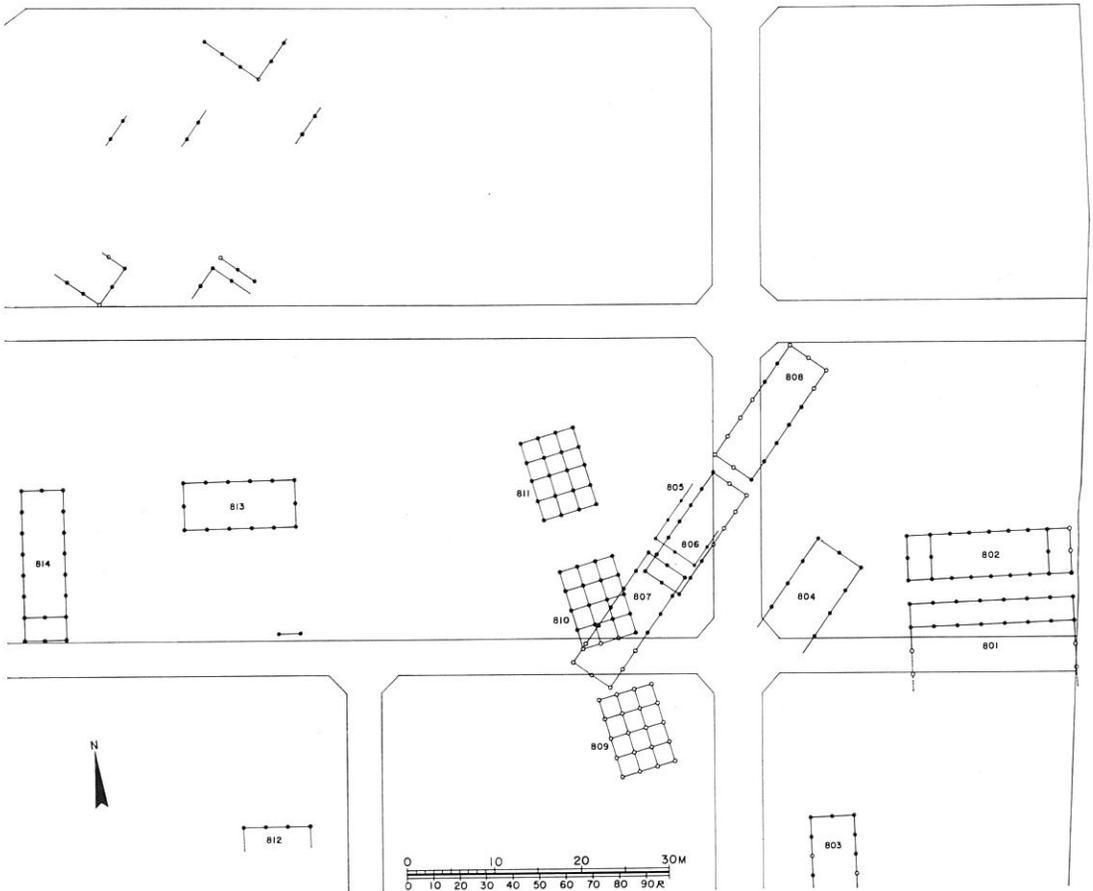
1 掘立柱建物

奈良時代の遺構を代表するものは、BA・BB地区を中心に検出した20棟以上にのぼる掘立柱建物である(第11図)。

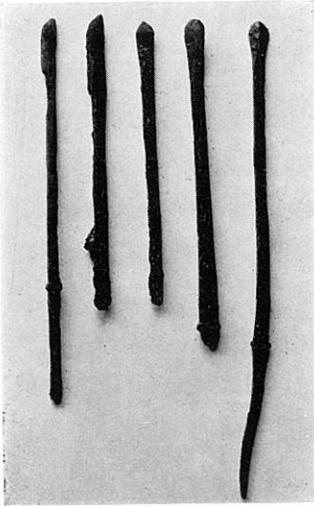
今回の調査ではまったく瓦が出土しなかったことから、建物の屋根は草葺であったと考えられる。各建物の規模はまちまちであるが、柱通りの方向から次にのべる3つの大きなグループに分けることができる。

I 群 柱通りが磁北より約10度西に振れた建物で、809・810・811の一行にならんだ3棟がこれにあたる。

809・810・811建物(図版3—下) 810・811建物は今回完掘したが、809建物は置土を排土して位置を知るとどめた。各建物とも4間(9.2m)×3間(6.3m)の同規模・構造で、屋根は寄棟であったと考えられる。各棟の間隔は6.1mで、その側柱通りが一直線にそろろう。縦横に束柱を配列していることから高床の建物で、おそらく倉庫として使ったものであろう。柱穴はいずれも一辺1mを越す方形または長方形



第11図 掘立柱建物配置図



第12図 BE地区出土鉄鏝

くするものとしてさしつかえなさそうである。

ここでⅠ～Ⅲ群の建物を通観してみると、Ⅰ群にぞくする810建物と、Ⅱ群にぞくする807建物とは柱穴の重複関係から前者が古く後者の方が新しいことがはっきりしているため、Ⅰ群がⅡ群に先だつ時期のものであるということがいえる。Ⅲ群については、Ⅰ・Ⅱ群のいずれとも重複しあわないためその相対的な順位はわからない。

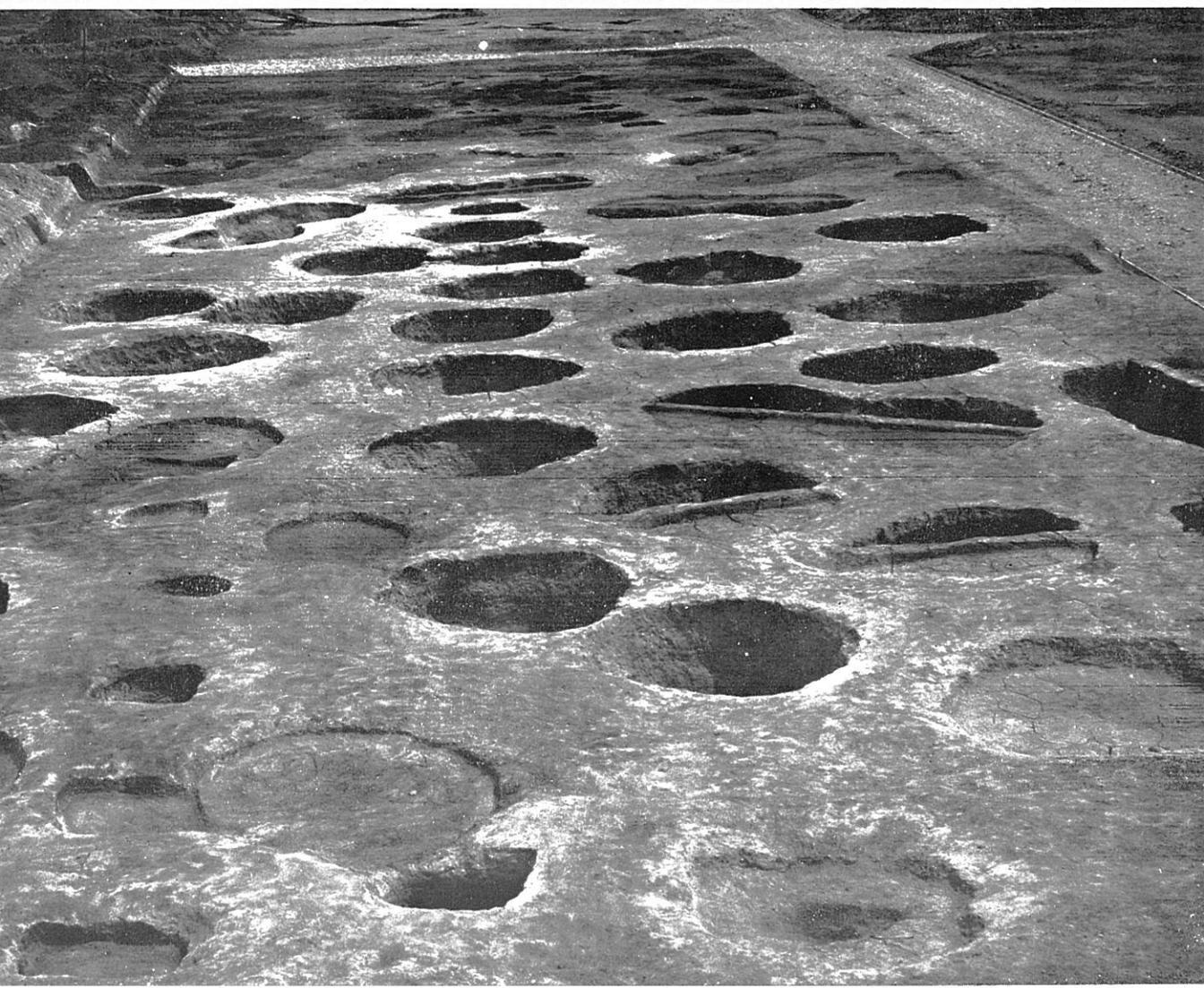
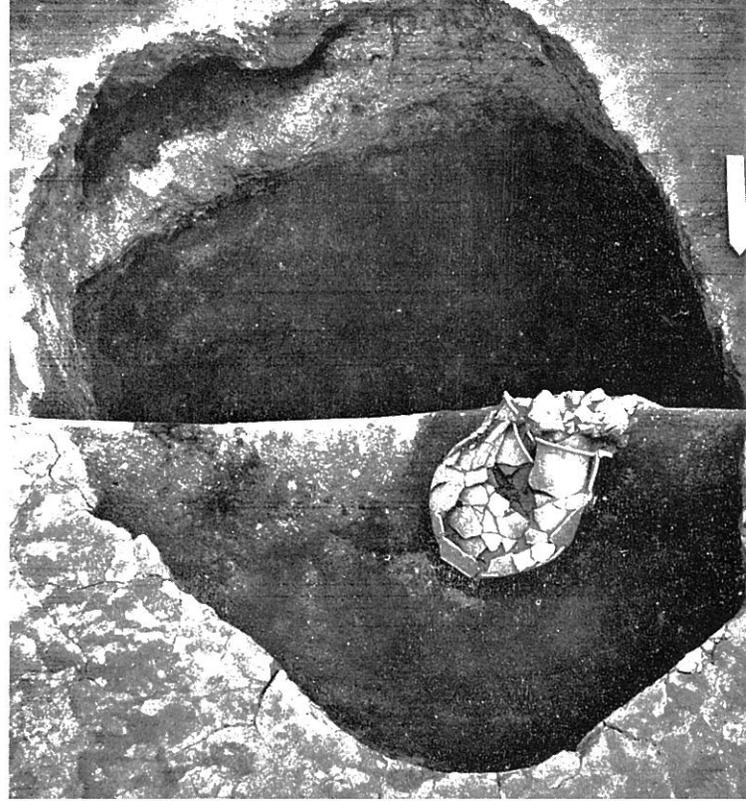
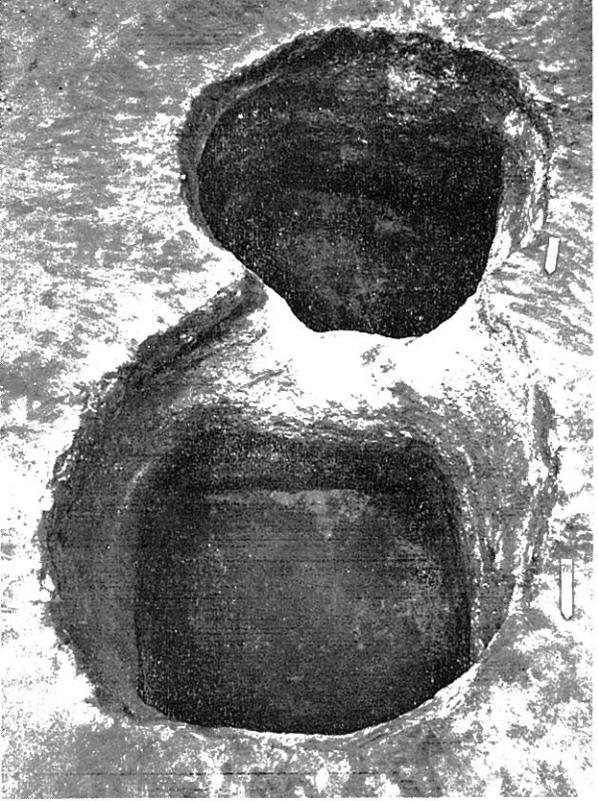
2 建物と遺物の関係

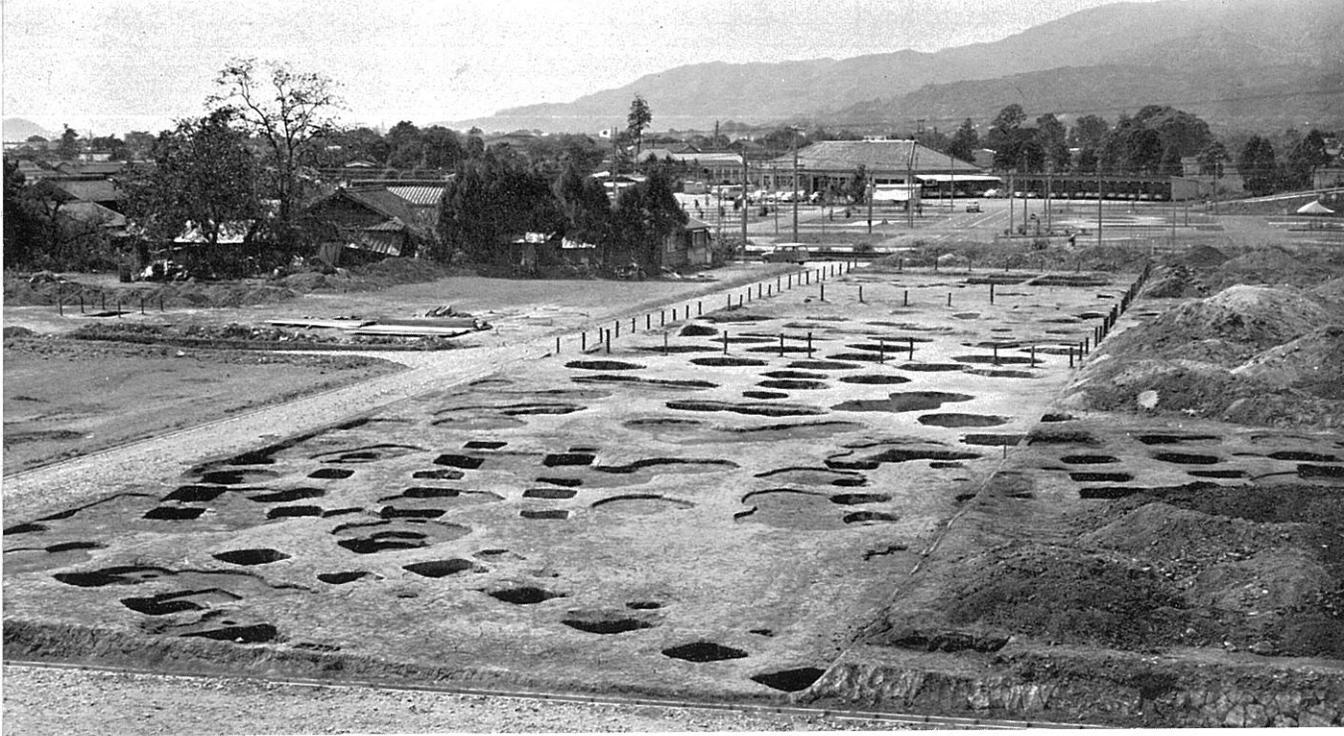
掘立柱建物群にともなう遺物は、A区ではもちろんのこと、BA・BB地区でも旧地表面が残っていないためごく少量で、1、2の柱穴から8世紀とおもわれる須恵器の小片を得たにすぎなかった。しかしBH・BF地区トレンチ調査地域では、かなりの遺物を得ることができた。須恵器の坏・蓋・壺・皿・高杯、土師器の坏・甕・皿・高杯等の破片で、未整理ではあるが大半が8世紀に位置づけられるもので、ほかに若干の7世紀末と推定できる土器がある。なお今回の調査では9世紀以後に下がるような遺物は見あたらなかった。特殊な遺物として、A区の表面採集資料のなかに、脚に木葉形らしい透孔のある陶製の円面硯(径約20cm)片がある。土器のほかには、発掘調査の動機となった1,000本ばかりの鉄鏝がある。この鉄鏝はBE地区のトレンチ調査個所で検出した東西溝(幅1.5m・深さ約12cm)の埋土中に、さびついて一塊となった状態で埋っていたらしい。鏝の形態は3種類くらいものがあり、いずれも長さ15cm内外の細根式鉄鏝で奈良時代にもっとも通有のものである。

以上の諸点からみて、小郡遺跡の掘立柱建物群は、早くて7世紀の末には一部の建物がたっていたと考えられ、おおくは8世紀のものとする事ができる。



第13図 805・806・807・810 建物重複状況





図版 3 上 BB地区全景 東から 下 810・811建物 北から

福岡県文化財調査報告書

第 39 集

昭和43年 3月31日

発行所 福岡県教育委員会
福岡市 西中洲

印刷所 福岡印刷株式会社
福岡市舞鶴1丁目2-5

